

## 儲 叶明 (チヨ ヨウメイ)

中国出身 / 2019~2020 年度奨学生

筑波大学 人文社会科学研究所 博士課程

### 1. 「虫の目」で世の中を見る

トンボなどの昆虫の目を顕微鏡でみると、蜂の巣のように、無数の小さな「目」が集合した構造になっている。この構造が「複眼」だと呼ばれ、「360° の視野」を獲得し、外敵から自身を守ることができる以外、動きを敏感に検知できることや偏光をみることもできる。私が日本にきてよかったことは、一言で表すのならば「より多角的に物事を見られるようになった」ことである。2016 年に渡日するまで、中国での経験しか持たない私にとっては、人間の「単眼」から虫の「複眼」に進化したようなことである。物事を観察するとき視点のシフトができてから、いままで気づきもしない微細なところにも目が行き、より繊細な感受性で日中両国の社会を捉えるようになった。いわゆる「異文化理解」の話なのだろう、と言われるとそれまでの話だが、実はそれだけの話ではない。

大学時代、日本語を練習したいという要望もあり、多少無理をしても当時学校にいる数の少ない日本人先生と、様々な機会を作って世間話をしようとしていた。ある日たまたまお昼ご飯の話題になり「先生は普段、どこでランチを食べられていますか？」と尋ねると、先生は「ランチは持参した弁当を食べるのが多いです。学校の食堂もたまには利用しますが、中華は油が多くて、毎日食べ続けるのは日本人には少し大変かもしれません。」と答えた。当時 18 歳で、二人前の料理を普通に平らげていた私は、和食にはさっぱりとした料理が多いとは知っていたけれど、中華にも野菜の料理がたくさんあるので「そんなに違うの？」と思わず首をかしげていた。実際、日本で何年間暮らした今は、油一滴も使わずにキャベツを千切りしてそのまま食べる日本人が、同じ野菜でも油たっぷりに炒める中華を食べ続けるとつらく感じるのも当然だと強く共感できるようになった。というのは、何年間日本での生活を続けているうちに、自分も油の多い食生活を続けると胃もたれする体質になってきているからである。「日本にはさっぱりした料理が多い」という知識だけでは、とても納得できなかったことである。

もう一例を挙げる。2011 年、およそ 8 年前の上海である。当時日系企業に勤めていた私は、本社の同僚が連れてくるお客様を出迎える仕事をよく任されていた。予定時刻より早めに空港に着いた場合は、いつもちょっとした人間観察をしていた。その時に気づいたのが、日本人のビジネスマンは、横型のコンパクトな黒いスーツケースを持ち歩く人が多いということである。しかし当時の私は、スーツケースは 26、小さくても 24 インチの縦型のものを好んでいた。「なぜ日本人はあんな小さいスーツケースを愛用しているのだろう」と不思議に思った。おそらく、持ち運びやすい、負担にならないからだろうといくつかの理由を考えていたけれど「それにしてもスーツケースは容量が大事じゃない？」と、なかなかそれがほしいとは思わなかった。日本で 4 年間暮らした今からしてみると、日本

でラッシュの時間帯に電車に乗ろうとすると、ただでさえぎっしりの満員電車で荷物を運ぶハードルを度外視しても、大きいスーツケースを満員電車に持ち運ぶには、他人の目線を気にしない勇気すら若干必要だ。また、東京・渋谷・新宿駅などの人の密度が高い場所での移動には、普段でもストレスが感じられやすく、それが早朝の出勤ラッシュの人込みの中をすり抜けるビジネスマンのことを考えると、確かにコンパクトであるほうが、小回りが利いて便利である。それに、宿泊先によっては、大きいスーツケースだと荷物置き場の仕切りに入らない可能性もある。小さい横型のスーツケースならば、ぎりぎりのエレベーターでもストレスなく乗れ、人混みの中をすいすい通りぬけられ、宿泊先でも気軽に預けられる。「こんなにメリットがあるんだ、自分もほしくなった！」と思うが、実際に日本で暮らしてみないと、なかなか心底から共感できない。

以上の二つのエピソードを通して何を言いたいかというと、「普通はこうだろう」という自らの先入観に噛み合わない物事に対して、その背後にある理由を「知識」としてそれとなく知っているのと、実際に体験し、「肌で感じる」のとは、また違う次元の話なのだという事である。異文化理解において、「心底から共鳴しないと、本当の理解には繋がらないんだ」と日本に来てからつくづく思った。

## 2. 「長い廊下における挨拶」

このような異文化への「共感」に関連する話は、日常生活レベルのみならず、実はより細かい言葉レベルの話にもつながる。「長い廊下における挨拶」（定延 2016）という言語学の分野で比較的有名な話がある。

学校や職場の建物の中に、一本の長いまっすぐな廊下を歩いていると、同僚/先生/同級生がこちらに向かって歩いているのに気付いているとする。多くの日本人は、このような状況に気まずさを感じるのだろう。これは日本社会における二つの意識されない「規範」（以下 a、b）があるからだとされている。

- a. 挨拶は、相手に気づいたら即刻におこなう。
- b. 挨拶したら即刻、別れるか、本題に入る （定延 2016: 137）

長い廊下では、以上の「規範」を破らざるをえない局面が当事者に迫る。すなわち、物理的な距離の長い廊下では、当事者がお互いのことに気づいた瞬間に挨拶するのは可能であるが、その後の「別れるか、本題に入るか」というプロセスは、物理的に達成できない（ルール b の実践はできなくなる）。その解決法は人によるのだが、多くの日本人が取る方法としては、「長い廊下を短い廊下にする」ことだという（定延 2016: 138）。具体的には、「相手と至近距離に近づくまで素知らぬ顔で歩き続け、相手との距離が十分に短くなるまで近づいたところで相手の目を見て『あ！』などと言って、『相手に気づいてみせ』れば」、その直後にすれちがうのも、本題に入るのも自然になるとされている（定延 2016: 139）。

このような「演技的な性質」を備えている行為が「相手に気づいてみせ、してみせる」(定延 2016) とされ、「空疎で見え透いた」演技であり、話し手を落ち着かなくさせる性質がある一方、逆に、「相手に気づく」ことに代用できるとされている。(ibid:139)

しかし、なぜ日本人が挨拶する時に、ルール b (挨拶したら即刻、別れるか、本題に入る) を遵守しないといけないのか? 言い換えれば、なぜ「演技的」にも、日本人は自らを落ち着かない状況に追い込むまで、「相手に気づいてみせる」という実践をしているのか、といったところまでは、定延による説明はない。その答えは、中国人が同じ状況での対処法との対照によって垣間見ることができる。

実はルール a は中国社会にも存在しているが、ルール b は若干異なる、「別れるか、本題に入るか」という選択肢はまあまあ同じだが、「**即刻**」かどうかは、状況に応じて対処する。なので、同じく「長い廊下」の状況におかれても、中国人はそれほど困惑しない。では、同じ状況において中国人はどのような解決法を取っているかということ、これもまた人によるのだが、おそらく気づいた瞬間にお互いに手を振りあって「気づいたよ」ということを示し、その後はお互い近くなるまで若干大きな声で簡単なことばを交わすことが多いだろう。たとえば、「上课?」(授業ですか?)、「饭吃了吗?」(ごはん食べた?)、「去哪儿啊?」(どこに行くの?) など、要するに、スモールトーク (small talk) のようなものである。形式的にはスモールトークだが、**これが中国社会のコンテキストでは「挨拶」として認識可能なのが日本と本質的な違いである**。逆に、中国語学習者向けの中国語教科書でよく紹介される、「你好」(こんにちは) という挨拶は、よほどよそよそしい間柄 (初対面とか) でないかぎり、使用するのが不自然になることをここで付記しておきたい。これらの挨拶 (「ごはん食べた」「どこへいくんですか」) に対して、「呵呵,吃过了?」(えー、食べたよ) と簡潔に答えて会話を終わらせようとするのも可能だが、必要に応じて、「うん、学校の○○食堂で食べたよ、○○は? 食べたの?」、「うん、○○と一緒に食べた」、「あの食堂はね、金曜の日替わりが美味しいんだよ、行ったことがある?」、「ない」、「じゃ今度一緒に行こうか?」、「いいよいいよ一緒に行こう」、「じゃ約束ね」.....のように、実際のスモールトークへと拡張させていくことも可能である。さらに、「ちなみに、明日の試験準備できた?」「課題はどうしているの?」などの展開も必要であればできる。ようするに、中国式の「挨拶」は、長い廊下において、非常に都合のよい「性質」が備わっていると言える。しかし、このようなやりとりを日本語に当てはめると、絶対にだめだとはいえないが、容認度が低くなる。大学の廊下で同僚/同級生/先生とばったり出会ったときに、歩きながら遠くから、「ごはん食べた?」と尋ねるのは「え?」と、まず不思議に思われるし、「どこへいくんですか?」と聞くと、「なぜそんなに一々詮索するの?」と不思議に思われる恐れがある。しかも、そもそも日本では、一本の廊下をはさんで大声で「会話」するのに抵抗を感じる人も少なくはないのだろう。即ち、日本社会において「挨拶」というものは、以下の①~③のような基準に則しているのではないかと筆者は思案する。

- ① 近距離で、且つその距離に適切な声で行われるべきものである。
- ② 「こんにちは!」、「あ!こんにちは」のような、形式的にベアとなるものである。
- ③ 必要がないかぎり、相手から余計な情報を引き出さないことが望ましい。簡潔に行われるべきである。

以上の①～③の「規範」は、無意識のうちに、日本人の行動パターンに染み込まれていると言えよう。このような「規範」の存在が、「長い廊下」の状況におかれる日本人を、「**してみせる**」という選択へと追い込む要因の一つだと考えられるのだろう。対して、中国社会においては、廊下越しに大声で挨拶してもかまわない。なお、必要がなくても相手から情報を引き出してよい「挨拶」には、「会話を膨らませやすい」という性質も備わり、「長い廊下」のような状況に対処するには有利である。

一方、中国人の日本語学習者に日本語を教えるときは、この長い廊下の挨拶に使われる「**してみせる**」ことを表す感嘆詞の、「あ!」をきっちり教えてあげるとは、実は非常に重要であるにもかかわらず、よく看過されるところである。その理由については、中国の社会的コンテキストにおいてそもそもこの演技的な「あ!」は不自然なものと理解されているからである。いわゆる、「お互いに気づいたのになぜ挨拶しないの?」「だって気づいたでしょ?」「見た見ぬふりをするのは気まずくない?」と不思議げに思われる可能性が高い。なお、そもそも日本語を教える立場にある中国人の教員自身が、その「あ!」によって伝達される微妙なニュアンスを読み取れていないことも考えられる。実は、この「**してみせる**」としての「あっ」は、ほかの場面にも実在する。例えば、ビジネスの場面において取引先からの電話に出るとき、かけ手が名乗った後、受け手が「あっ、お世話になっておりますー」と、「あっ」を付け加えて挨拶することが多い。ここでの「あ!」は、「相手が重要な人物なのだ」と相手の名乗りをとおして気づいた（電話に出る前にわかっていただけにもかかわらず）、その瞬間の「**慎み**」を表している表現だと言えよう（ちなみに、同じくつつしみを表すための操作として、「ます」の「す」を、あえて「si」（専門用語を使うと「**母音の無性化**」という現象だが）で発音しなく、「su」で発音することが多い）。この意味で、「**してみせる**」ということは、「長い廊下」という特殊な状況においてのみの話ではなく、日本社会に適応していくための一種のテクニック、少し誇張された言い方をすると、**素養**として身につける必要があると考えられる。

以上の説明から、普段気付きもしない「廊下」における挨拶ぐらいの小さな出来事からも、実は、日中の間の「規範」の相違が垣間見える。このような「規範」の相違は、「挨拶」にだけ現れているものではない。筆者のフィールドワークでは、日中のほかの言語行為にも反映されていることが分かった。ただ、紙幅の関係で、ここでは大風呂敷を広げずに別途の機会に割愛する。

一つの「文化」は、異質のものに遭遇しないと気づかない・意識しない、いわゆる無色無臭の、空気のような存在である。「文化」というと、いかにも膨大に聞こえる。しかも「文化論」的なことを話すと、たいてい「帯に短し襷に長し」ということになりがちだ

が、かといって不要なものではない。「昆虫の目」をとおして日常の何の変哲もない出来事を覗いてみると、普段とは一変した面白い世界が見えてくるかもしれないからである。

### 3. 奨学生期間中にできたこと・将来計画

このような「複眼」の視点を獲得したのも、1年間、財団の各種のイベントに参加させてもらったおかげである。実は、1節と2節で記述した諸観点が、当初志望動機に書いた「より場面・状況を重視した日本語」を教えることにもつなげられると思う。なお、1節で述べたように、「知識」としてなんとなく知っているのと、実際に体験するのとはまた違う話なので、このような意味で、歌舞伎の鑑賞、富士山の合宿、クラシックコンサートの鑑賞会からも非常に良い体験をさせてもらった。このような体験は、今後教育の現場に立つ筆者のネタ、糧になるに違いない。また、将来、筆者の目標は、日本語教育に従事するだけでなく、一人の社会言語学の研究者としても活動したいので、そのために、2019年度では学会発表及び学術論文の投稿にも積極的に従事してきた。次に、2019年度の発表歴、投稿歴及び学会受賞歴を以下のように報告する。

---

#### 学会発表

- 儲叶明.2019.「逸脱的な行為に対する日中母語話者の発話について—ロールプレイを中心に」、第11回中日対照言語学シンポジウム、西安外国語大学
- Yeming. Chu. 2019. “Native Japanese speech act in a deviant situation - Focus on Role-Play analysis”, The 3rd EAJJS (The European Association for Japanese Studies) conference in Japan, University of Tsukuba, 14-15 September 2019.
- 儲叶明.2020.「中国人友人同士の食事場面における『遊び』としての対立」(発表決定)、第44回社会言語科学学会研究大会、同志社大学、今出川キャンパス

#### 学術論文：

- 儲叶明.2020.「中国人友人同士の食事場面における『遊び』としての対立」、『社会言語科学第44回大会発表論文集』、pp. (提出済み2月下旬刊行)

#### 査読付き雑誌論文：

- 儲叶明.2019.「否定的評価に見る規範意識と対人関係—ボライトネス理論からの日中対照分析—」、『語用論研究』第21号(3月下旬刊行予定)

#### 学会受賞歴：

- 日本語用論学会 (PSJ 2018 日本語用論学会第21回大会、大会発表賞)、2019年11月受賞
  - 中日対照言語学学会 (第11回中日対照言語学シンポジウム、博士フォーラム優秀賞)、2019年8月受賞
-

目標にはまだまだ遠い道のりであるが、このように自分の目標に向けて少しずつ近づくことができたことも、財団の支援がなくてはとてもできないことなので、心より感謝している。来年度の計画も既に立てている。学会発表2回、投稿1本を予定している。

この1年で成長したことと言えば、修士課程では学外の発表をあまりしていなかったもので、2019年度で最も成長したことは、様々な学会発表、投稿を通してアカデミックの世界の「運営」の仕方、方法が前より少しずつ見えるようになってきたことである。具体的には、投稿する場合は、質的にどこまでのものを提出すれば採用される可能性があるのか、査読者のコメントにはどう対処すればよいのか、最初の原稿送付から採用されるまでどのようなプロセスがあるのか、何回の修正が必要なのか、返信内容はいかに執筆するのかなどを学ばせてもらった。また、アカデミックの世界もひと昔自分がいたビジネスの世界も、一つの接点(業界)を決め(通し)て、世の中と繋がっていくという本質は変わっていないと実感し、昔の仕事の経験に助けられたことも多々あると今つくづく感じている。

一方、2019年度の不幸な事件として、1月からずっとトップニュースを占める新型コロナウイルスがある。これに対して世界中が未曾有の懸念を抱いている。新型ウイルスの感染で亡くなった方も多数おり、残念・不安な気持ちが募りつつある世の中だが、最大のピンチは最大の契機にもなりうると思う。その一例として、今回のウイルスとの苦戦が続いている中国に対して、中国語検定試験「HSK」の日本事務局が湖北省の大学などに送った支援物資の箱に記されていた“山川異域，風月同天”という漢詩の一節が、中国で今迄にない話題を呼んでいることが挙げられる。この詩の意味は極めてシンプルで、「山も川も異なる場所に暮らしている私たちが、同じ空の下で同じ風を感じ、同じ月の下で生きています」。その次にもう一節、“寄諸仏子，共結来縁”がある、「仏の教えを学んでいる皆さんにこの袈裟をお送りします、ともに末永く縁を結びましょう」。

およそ1300年前、唐の時代の高僧である鑑真和尚を日本に呼び寄せた時、日本の長屋王が唐に送った千着の袈裟にこの2節の詩文が刺しゅうされていた。それに心を打たれた鑑真和尚が、苦難と命の危険を覚悟して日本に赴く決意を決めたという。

千年にも亘った歴史を経過した2020年、中国がピンチの時に、日本側が物質とともにこの詩文を中国に届けたことが、再び無数の中国人の心を動かした。この話は、中国のさまざまなメディアにも頻繁的に取り上げられ、新型コロナウイルスの感染が広がる中、日本側の暖かい支援によって、中国の政府から一般市民まで、日本に対する感謝の気持ちが高まっている。民間だけではなく、中国政府も、外務省の報道官を通して、日本側から届けてくれた物質に書かれた詩文、日本の中小学校が、クラスの中の中国出身の同級生を差別視しないよう、生徒の親に配ったお知らせなど、今回の新型コロナウイルスの時期における日本側が中国に与えてくれた暖かい支援に対して、細かいところまで言葉で逐一に言及しながら、「日本側が我々に対する支援、理解、支持を心より感謝しており、心に銘じる」と発言した。私が生まれてから今迄30年間の人生の中、中国国内が日本に対してここまで好感を示すのは、実に初めてである。新型コロナウイルスの感染の一刻早く収束つ

くよう、心より願う。日中友好の新たな時代の到来を、心より願う。なお、そのような時代が早く到来するよう、微塵ながらも、助力する一員でありたい。

#### 4. 参考文献

定延利之（2016） 『コミュニケーションへの言語的接近』 ひつじ書房